

Title	<大會抄録>漢代の中朝について
Author(s)	米田, 健志
Citation	東洋史研究 (2002), 61(3): 489-489
Issue Date	2002-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/155439
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

大會抄錄

漢代の中朝について

米田健志

前漢後半期の中央政府が、丞相・御史大夫・九卿をはじめとする外朝と、將軍・侍中・給事中・宦官などによって形成される中朝（内朝）とに分れていたことは、すでに周知のことである。そして、この中朝については増淵龍夫氏が、中朝は國政の中樞を擔う政策決定機關であり、これに對して外朝は單なる事務執行機關であるとの説を提唱して以來、その後も多數の研究成果が著されている。

しかしながら、こうした研究の蓄積にもかかわらず、現在までに中朝について明瞭なイメージが形成されているとはいえないように思われる。その要因として、從來の研究においては主として、中朝と外朝との間での權力闘争の推移、もしくは皇帝と外戚を中心とした權力構造といった、いわば政治史的視點から考察がなされてきたことが挙げられよう。そこでは、中朝とは外朝に比べて相對的に「中」側にある——すなわち、より皇帝に親近な——皇帝の側近集團である、といった一種曖昧な捉え方しかなされていないのである。

こうした反省に立つて本報告では、中朝の制度的な諸側面、す

なわち中朝とは宮殿内のどのような空間であるのか、そこに出入を許された中朝官とは如何なる権限・職掌を有していたのか、中朝における政務遂行に際しては如何なる手續きがとられたか、そして中朝官はそうした手續きにどのように關與していたのか、といった點について考證を行い、これによって中朝の具體像を描き出したいと考えている。

唐末五代河東地域における

ソグド系武人の系統と沙陀勢力

森 部 豊

本報告は、唐末五代時期、河東地域北部に居住していたソグド系武人集團の系統と、それが沙陀突厥の勢力伸張に與えた影響を論じるものである。八世紀後半、河東地域北部（恒山以北の桑乾河流域）に移住したソグド系住民は、東突厥第一カガン國の崩壊後に中國へ移住してきた者の後裔で、もとはオルドス高原南部に置かれた六つの靺鞨州に所屬したため、從來「六州胡」と稱されてきた。彼らの特徴は、騎射技術に秀でていた點が挙げられ、また八世紀前半に唐朝に反旗を翻した六州胡のリーダーが突厥の稱號である「葉護」を名乗っている。これらのことから突厥の影響を多分に受けていると考えられる。この突厥的要素を有するソグド系住民を、ソグド系突厥と呼ぶことにしたい。このソグド系突厥は九世紀末から「薩葛部」「安慶部」という集團名で編纂史料